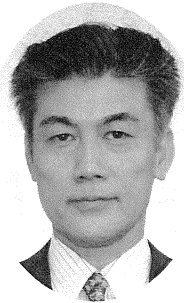


発行
有根会
書道

第二回会報によせて



会長
松下 英風

新生「書道研究有根会」を
結成し早三年になります。書
展に於いても、電気文化会館
より愛知県美術館に変わり二
回を終えました。観客数も大
いに増え大変に喜ばしい事
です。今回の書展は三会場にな
り、会員皆さんの力をお借り
し盛大に幕を閉じることが出
来、有難う御座いました。
有根会も、少しずつ変わっ
ていくことを感じます。役員
そして各部の皆さんのご尽力
に感謝し、これからも会員の
皆さんが、一丸となってより
良い会に発展する様、願うと
ころであります。

会員数の増強は会の力とな
り、研究会は皆さんのレベル
の向上であります。
書展とは世に問う場でもあ
ります。よって、発表者は勿
論のこと、代表者である会長
の全責任でもありますので、
皆さんの作品は必ず目を通さ
なければなりません。
これからは、曖昧さを無く
し当り前な事を通していきま
す。その為にも役員会をより
一層充実させ、会員皆さんと
の一体感のある会にしていき
たいと思っておりますので、皆さん
宜しくお願いします。

有根会書展

第四十三回 平成二十四年十二月二十六、二十七日
平成二十五年一月四日 六日
愛知県美術館ギャラリー J室 八階
アートスペース G・H室 十二階
アートスペース X室 地下二階

第四十三回 有根会書展を終えて

天見 芳泉
平成二十五年幕開け、風は
冷たかったけれど、暖かな陽
射しを浴び穏やかな日で始
まった。

今回の有根会書展は、昨年
に続き、愛知芸術文化セン
ターにて年末年始で開催した。
今回は、アートスペースG
H室(十二階)に、十八点ギャ
ラリーJ室(八階)に八十三
点、アートスペースX室(地
下二階)に第二十九回公募展
を百五十三点と初めて三会場
での飾り付けで、会員一同は
必死の作業で開会に備えた。
平素の二倍も時間を要し、六
時ぎりぎり迄
かかったけれ
ど、今までに
ない充実感、
達成感、そし
て結束の力



「伊豆のそば屋にて」

を皆が感じ
た事は、今
後の有根会
の発展の為
に又一步前
進したかの
様に思えた。

芝堂先生
の「東西南
北」 私達
を見守って
いて下さる
様な清らか
な気持ちに。

十二階の
色紙「伊豆のそば屋にて」
繊細な線で描かれ近くに先生
の気配を感じ心が和みます。

最後に課題は 沢山残った
けれど、ひとつずつ、クリア
して、次回は、更に、更に素
晴らしい書展に繋がると信じ
ている。

有根は 字の如く 大きな
家族であり 皆が皆を支え合
い助けあって進歩している。



「東西南北」



地下二階公募展会場



八階ギャラリー



十二階役員展会場

第四十三回有根会書展

及び第二十九回公募展

会員展入賞者

芝堂大賞 落合玉泉

芝堂準大賞

庄田翠苑 岡田愛子

加藤香雪 川松杷泉

莊田芝蒔

中日賞

木戸長山 武田郁野

安藤聡美 奥村春翠

粕谷芳翠

東海テレビ賞

岡島暁雲 中根翠榮

夏目美沙

芝堂大賞を受賞して

落合 玉泉

この度は、栄えある芝堂大賞をいただきまして本当にありがとうございます。今回は李白の詩「酒を把って月に問う」を選びました。李白の月に対する強い親近感にとっても共感したからです。「月」が七回も出てくるので少々悩みましたが、墨がなくならないうちに、とにかく夢中で百十二字を書きあげました。まだまだ未熟者ですが、これから有根会の一員として精進してまいりますので、ご指

導の程よろしくお願い申し上げます。

公募展入賞者

有根会賞

尾崎奈津 壁谷由美

原科智子

特選

本田清山 橋本瑞舟

柄澤信一 河合 要

美濃部純 馬淵 等

秀作

瀬戸春仙 鶴田大樹

榊原和代 池田珠樹

赤井貴月 青山芳柳

磯村香月 寺林絹代

畑中吟子 中島雅利

高須舉舟 清水美子

今井智乃 山田祥子

田中千秋 稲吉邦子

宮尾梨沙 野口美枝

寺西愛子 古橋昂雪

柘植真浪 早川美香

柳澤孝子 佐伍恵水

本間賀世枝 中尾美恵子

岩田純子 青木佳代子

高田香代 上垣内瀬業

丹羽美由紀

有根会賞をいただいて

原科 智子

有根会書展公募展において有根会賞をいただき、誠にあ

りがとうございました。

太陽のように見守りつつも時にびしっと要所をついてご指導くださる永谷先生のおかげと感謝しております。

今回は山家心中集に挑戦しましたが、青雲のかな課題で一線を始めて以来、いつも先生から大切にするように言われている「呼吸」を意識し、肩に力を入れないように、普段のいいこの時と同じ気持ちで書き上げました。

今までは与えられた課題をこなすことで満足してしまいがちでしたが、これを機に少しチャレンジ精神を持って書に取り組みたいと思っています。

書評

理事長 加藤 矢舟

作品の展示陳列作業後に松下英風会長をはじめ、幹部役員で作品の審査にあたり、芝堂大賞一名、芝堂準大賞五名、中日賞五名、東海テレビ賞三名を決定しました。審査の基準については、芝堂先生の書風（日本的な純粹な美、大和人が純粹な心で描くまほろばの魅力を淡い墨色で高らかに書で謳う）を念頭によく書き込みが行われ、錬磨された作

品を選びました。中でも、芝堂大賞を受賞した落合玉泉さんの作品「把酒問月」はスケールの大きい大作で筆力が漲り、流麗典雅な書法が見事でした。

今後有根会書展の特色としては、芝堂先生が歩んだ書風をベースに各自が古典を涉猟し、独自性のある作品づくりに邁進していただくことを願っています。

公募展においては、前回に比べ出品数が増加しうれしい限りです。半切の軸作品が過半数を占め、どの作品も品格があり、努力作が多かったと思います。

第四十四回「日展」

平成二十五年八月五日～二十日

愛知県美術館ギャラリー

入選

松下英風 加藤矢舟

前夜祭

一月二十四日 名古屋観光ホテル

第二十九回読売書法展中部展

平成二十四年九月十日～十七日

第一会場

愛知県美術館ギャラリー

第二会場

愛知県産業労働センター

(ウインクあいち)

読売奨励賞 落合玉泉
秀逸 岩部恵子 西脇昭子

清水裕子 小林雅子
祝賀懇親会
九月十七日 名古屋観光ホテル

読売書法展
入賞・入選 有根祝賀会
平成二十四年八月二十六日 龍園本店

読売奨励賞をいただいて

落合 玉泉

この度は思いもかけず読売奨励賞という素晴らしい賞をいただき、本当にありがとうございます。これも偏に、松下英風先生始め、古川昇史先生の熱いご指導の賜と、ただただ感謝の気持ちで一杯です。東京の国立新美術館では、全国から集められた気迫に満ちた格調高い作品を目の当たりにして、正直、鳥肌が立ちました。書の流派やジャンルを超え、様々な作品と出合い、感動し、たくさん吸収していきたいです。今は焦らず、できることからコツコツ挑戦していこうと思っています。未熟者ですが、これからもご指導ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。

芝堂先生の刻

三十帖策子

松下 芝堂

真言の法文を書いたもので、三十帖からなっている。この名がある。写字生が書いたところもあり、全部が空海の書ではない。

冊子を見るには「静かだ」と思います。しかしその間に目をやると、目がぐるぐるとたえまなく動いて、いつの間にか、行を追っていきます。そして、一字、一字を、一点一角に目がとどきます。そして線がぼつぼつと目に入っていきます。一転してまた行を追っていきます。その行が一本の線に見えるようになります。一本の線を追っているとどこが最後かわからない。終わったと思つたらまたはじめから始まっています。どこが最初か、どこが最後かわからない。線というものは、動と静を持っています。

動であつても静である。静であつて動であります。

白に一本の線を引きます。白さがますます白く見え、その白が生きている。動いているように思えます。

一本の線は一つの静であります。

白があつて、一本の線があるところに紙面の全体が生きてくるのです。

冊子の線は豊かで、気分やリズムの快調さは、音の無い世界に一つの音楽をつくりだしているようです。

名曲でありますので、それが頭から切れてしまうようなことはありません。

脳裏に妙音をのこします。私にとって冊子を見ることはこの世の醍醐味です。

冊子には無駄なところがありません。不用意に引かれた線とか、うたれた点などどこにも見当りません。

だからどこを針でついてもしゃんとして手ごたえがあります。生きています。

ぴんとはっています。

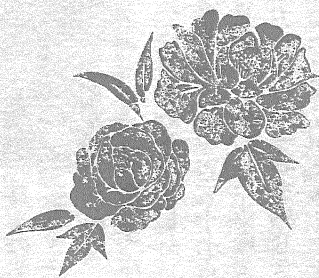
一寸点を横にずらしても、角が上に上つても、必然の

結果出来たものであるから、一本の線はくずれ、調和をみだし、生は一転して死んでしまします。それは単純に自然と結びついているからではないでしょうか。

画家でも、舞踊家でも、また建築家でも、この一本の線の霊を把握することが一大使命ではないでしょうか。

我線の行者とならむ。

空海之書 鑑賞篇より
昭和五十四年六月



豊川稲荷御案内

豊川稲荷は曹洞宗妙厳寺内にある。妙厳寺の山門鎮護のために、「陀枳尼真天」が稲荷信仰として祀られた。

天文年間に今川義元が伽藍を造営し以降、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の崇敬も厚く、関ヶ原合戦後、謝恩のため寺領を寄進している。江戸時代には、商売繁盛・家内安全・福徳開運の神として、参拝者は増大した。明治維新の

いわゆる神仏分離令によつて「陀枳尼真天」は仏法守護の善神として厄を除かれた。

現在の本殿は、明治四十一年（一九〇八）より三十年の歳月を費して、昭和五年完成。いまも全国に広く信仰を集めている。

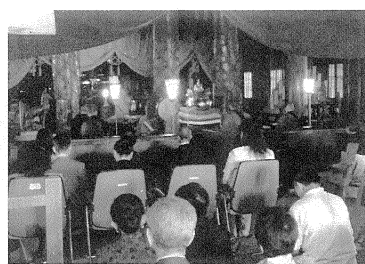
平成二十四年四月二十九日恒例の「有根会総会」が豊川稲荷で行われた。本堂に於てご折祷を受け、書院の広いお座敷で総会の後、朱塗りの御膳で精進料理をいただく。引きつづき研究会が行われ、先生方の批評・指導を受けた。



研究会



総会



本堂にて御折祷

社中展

第五回雙根会書展

平成二十四年七月六日～八日

豊田市民文化会館

加藤 香雪

第五回記念展で母の加藤翠香遺墨展も併催しました。左記は中日新聞とよたホームニュースより転載した記事です。

良寛詩の大作など

力作ずらり

神田町の書家、加藤矢舟さん主宰の「雙根会」が、第五回記念書展を、豊田市民文化会館A展示室で6～8日に開催し、会員らの作品を展示しました。矢舟さんの母、故・加藤翠香遺墨展と、初の学生展も併催。



矢舟さんは「会員の熱意が実って、開催を迎えることができ、うれしい」。会の特徴である日本の情緒を醸し出す薄墨の力作が並ぶ会場で、会員らの頑張りに目を細めます。

24人の会員が、書の原因と学ぶ古典の臨書や、漢字、仮名や調和体の創作計88点を展示。師で元日展参事の松下芝堂先生らの特別出品も。遺墨展では翠香さんの日展入選作品など28点を展示。37回忌の開催に、「花を添えていたたたいた。長いトンネル(をくぐったよう)」と、柔らかな表情を見せていました。

豊溪会書展

杉浦 仁美

平成二十五年一月二十九日から二月三日まで豊川市にある桜ヶ丘ミュージアムにおいて豊溪会書展を開催いたしました。

今年のテーマは「花・鳥・風・月」。出品者それぞれがこの中から一つ選んで好きな料紙にそのテーマにちなんだ文字を書きました。タテ七尺×ヨコ十二尺の大きな継ぎ紙風のパネルに美しく飾りました。そして書展の核となる、



師匠である古川昇史先生のダイナミックかつ日本の美を感じさせる作品は、会場を、ひとつにまとめたあげました。出品者百十三名、百三十七点の作品が一堂に会し、来場された方からは、「春を感じさせるね」、「作品が大きくてすごいね」など嬉しい反応をいただきました。今回は全体的に春らしい華やかな会場になりました。

第十二回もえぎ書展

小林 雅子

永谷恵子先生主宰のもえぎ書展を、平成二十五年三月二十九日～三十一日に、瀬戸市文化センター文化交流館にて開催しました。高校生から九十歳代までの会員二十九名、約九十点の作品展示となりました。

今回の会員合同作品展



は「集字聖教序」で、半紙に六文字を六枚ずつ分担し、約一年かけてじっくり取り組みました。毎週のお稽古のたびに添削していただいたのですが、書いても書いてもなかなか上手いかず、臨書の難しさを痛感しました。会場の壁一面に展示した縦4m×横4.5mの大きな合同作品を目にした時、まだまだ拙い臨書ですが、頑張ってお稽古を積み重ねてよかったです。

興文会・有根会の先生や会員の方々にも、お忙しい中遠路お越しいただき、たくさん温かいお言葉をかけていただきました。どうもありがとうございました。

平成二十四年 活動状況について

遠山 翔雅

第四十九回 清心会条幅展

日時 平成二十四年二月十一日・十二日

場所 瀬戸市文化センター文化交流館

ギャラリー・十一会議室・十二会議室

第三十回あすなろ書初公募展
日時 平成二十四年三月十日

日・十一日

場所 瀬戸市文化センター文化交流館 三階

第三十八回 清心書展

日時 平成二十四年六月二日～三日

場所 瀬戸市文化センター文化交流館 三階

計報

山口 房子氏(会員)

平成二十四年六月八日 享年 七十二歳

伊藤 波舟氏(参与)

平成二十四年七月二十七日 享年 八十八歳

あとがき

有根会発展を象徴する立派な書展で平成二十五年が幕開けしました。

新生有根会がより結束し、ますます若い人の力で発展させますよう望みます。

原稿をお寄せ下さいました先生方ありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

編集部長 庄田 翠苑
編集委員 大野 昭子・山田 千鶴
加藤 翠林・勝野 紅雪